

トピックス

1. ウクライナに平和を
2. 梅雨明け宣言



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 55

2022年7月号

小暑～大暑の候 梅雨明け宣言

6月28日、短い梅雨が明けた。記録的な短さと早さ。例年より2週間も早い。こうなると戻り梅雨や大雨が心配だ。降水量不足による水不足の懸念もある。まだ6月だというのに猛暑日(35℃以上)が続き全国各地で40℃に達する気温が記録されている。もはや本格的な夏だ。すっかり夏の空気に変わってしまった。うっかり者のセミの初鳴きを聞いた人もいる。こうも暑いとやはり「地球温暖化」が頭をよぎる。春夏秋冬。四季がはっきりしている日本では、それぞれの季節にふさわしい空気(風)と景色があり、日本人はそれをそれぞれの季節の文化として生み育ててきた。夏は万物が燃えるように成長、繁茂する季節。植物の多くは成熟し、そして実りの秋を迎える。コロナ禍も一息ついて、夏祭りや秋祭りが3年ぶりに復活し、町や村に喜びの声が満ち溢れる。日常が少しずつ少しずつ戻る気配は人々の心を和ませる。祭りを通して伝統や文化が伝承されることは望ましい。言伝え語り継がれることで世代が繋がっていく。父から子へ、子から孫へ。IT、AIの時代にあってもきっと守らなければならない絆の糸がある。感染防止は十分に、コロナに負けぬよう、祭りを復活させよう。潤いの中にこそ、明日への希望がある。うまくいかないことが多い人生にも、明るい光がさすことを祈って、熱中症にかからぬよう、元気に夏を乗り切りましょう。



小暑 7月7日

大暑 7月23日

随筆 『龍馬と私』 ～龍馬没後の評価～



明治維新の三傑といえ、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允ということになる。維新回天の表舞台で活躍した三人であるから異論はない。しかし考えてみるとこの3人を英雄ならしめたのは、龍馬の礎によるものであると断言していい。明治新政府は、岩倉具視や三条実美といった元公卿を除けば「薩長土肥」によって運営された。中でも強力だったのは薩摩閥、長州閥でその存在は、後々まで藩閥政治を引きずり初期の政党政治にも大きく影響を与え続けた。3人が顕彰されるのは自然の流れだ。しかし、志半ばで維新の光の陰でその直前である、慶応3年(1867)11月15日凶刃に倒れた

龍馬の存在は、いわば縁の下の力持ち程度にその評価を落とされ、その存在そのものが薄れていった。歴史家の評価も様々であるが、その功績を薩長同盟を成立させたこと、「船中八策」を示して大政奉還運動を進めたことの二つに絞るとしても、維新回天に果たした功績は消えるものではない。司馬遼太郎の「竜馬がゆく」で国民的英雄となった龍馬はきっとあの世で苦笑しているに違いない。「どうでも ええことぜよ」そんな声が聞こえてきそうな気がする。

龍馬が暗殺されて155年。日本中から愛され続け、高知では圧倒的な人気を誇る龍馬を正當に評価し、日本史上に位置付ける時が来ているのかもしれない。



播州日誌

Good-by「923」 Hello「2929」

6月17日。リース期間の満了というよりも新車の納車日。3代目のプリウスだった。リース期間は合計15年。幸いにも無事故であり故障一つなかった。快適な走り、安全装置、抜群の燃費効率。特に軽快なフットワークは、営業車として最高だった。3代目は走行距離11万キロ、年間約21000キロのったことになる。名車だと思うし、人気ナンバー1であることも納得である。お蔭様で運転免許証の方もゴールドに変わった。GSに行くのを忘れるぐらい燃費が良く伸びた。25キロは普通で30キロを超えることもあった。「姫さ 923」というプレートナンバー。実はプリウス3台とも同じ番号。家内の名前の語呂合わせ、つまり「くにみ」。車音痴の家内のために、スーパーなどで車を間違えないようにこの番号にした。新車にも思っていたが、本人からの「気恥ずかしいから、もうええわ」ということになり、新車は「2929」になった。私の体型から、間違っても肉（にく）肉（にく）と呼んではいけない。名前にちなんで福（ふく）福（ふく）の語呂合わせである。

17日当日は家族で洗車してお別れしようと思う。5年間のねぎらいと、ありがとうの言葉を添えて・・・。

2022. 6. 15

ウクライナに平和を

ウクライナへのロシアの侵攻から4か月が経過した。今だに南部、東部では激しい戦闘が続いており両軍の戦死者や民間人の犠牲者の数はとどまるところを知らない。単純にプーチン大統領が悪で、ゼレンスキー大統領が善であるとは言い切れないものを感じている。数冊のウクライナ関連の本を読んだ。

ウクライナの歴史そのものが、支配と被支配の連続であり、国土も時として膨張したり縮小したりしている。

国の歴史というより地政学上の土地をめぐる興亡がウクライナの歴史だということもできる。

2月24日がずっと以前から予定されていたことは確実であり、アメリカはただならぬ気配を察知し世界に警告を発していた。ギリギリのところでは侵攻は回避されるだろうとの世界の常識は、たった一人の独裁者の固い信念によって打ち破られてしまった。2014年のクリミア半島の併合から戦争が継続していたのであり、2月24日はその延長線上にあった。親ロシア派の人々を開放するという建前はこの時始まった。いやそれ以前でも、シリア紛争、チエチエン紛争、など反ロシア勢力の追い落としに強権を発揮した。プーチンのメンタリティーは正に欺瞞と詭弁の塊のようで、旧ソ連共産党



やKGBの遺伝子そのものだと言われている。専門家はヒトラーとの類似性を指摘する。国が敗戦などで経済的に疲弊しているとき、貧しく苦しんでいる人の愛国心を扇動、富豪や一部の特権階級を徹底的に糾弾し、悪い事全てそれらの一部の人々、あるいは他国のせいであると洗脳する。民族主義、愛国主義に訴えて国民の人気を集める。権力を握った後は、独裁者となって、自分に反対したり批判したりするものを弾圧する。徹底的なメディアの独占的運用、世界中に張り巡らされたエージェンシー（スパイ）網。完璧な言論統制、特殊（暗殺）部隊。恐怖政治の中、ロシア人であることに負い目を感じながら、現政権を批判することなどできない。それは「死」を意味するからだ。戦争は外交の失敗と言われる。NATO 寄りに推移する東ヨーロッパ、緩衝地帯としてのウクライナ。プーチンから見れば安全保障上看過できない情勢だった。2000年政権を握ってからウクライナ侵攻は彼の究極の目的であったかもしれない。ロシア、ベラルーシ、ウクライナは元々ロシアの国。プーチンは「大いなるロシアの復活」を目指して戦い続けるであろう。

どのような歴史があり、外交的な失敗があり、ロシアの安全保障上の危機を主張しようとも、主権国家であるウクライナへのロシアの侵攻は国際法上も決して許されるものではない。常任理事国でもあるロシアは最後まで「対話」による解決を図る責務を負っている。核兵器の使用は地球滅亡への道そのもの。長引く戦争ではあるが、武力による現状変更は国連憲章で禁じられている。良心を取り戻し、この原点に戻って1日も早い終戦を祈らずにはいられない。

2022. 6. 29

- 参考文献
- | | |
|-------------|----------------|
| プーチンの正体 | (黒井文太郎 宝島社新書) |
| プーチンの野望 | (佐藤 優 潮出版社) |
| 物語ウクライナの歴史 | (黒川裕次 中公新書) |
| プーチン帝国は崩壊する | (河東哲夫 McIN 新書) |
| ロシアを決して信じるな | (中村逸郎 新潮新書) |



～南国土佐を後にして～

第5回 「神戸編」

神戸での9年間。昭和20年の終戦から3年、戦後復興の槌音がようやく聞こえ始めたころ、昭和23年に私はこの世に生をうけた。敗戦国日本の肩身は狭く、戦勝国の風当たりは強かった。そんな重苦しい空気が日本全体を厚い雲のように覆っていた。子ども心にそれを感じることもあった。生きねばならぬ時の日本人の粘りと力強さはこの国の固有のものだと思う。戦地から復員した男たちは、兎も角生きるために、家族を食わせるために、無い知恵を絞り体を動かすことによって日々の不安をはねのけていた。色々な職業が生まれ、泡のように消えていった。サバイバルのような状況の中で、人々はひもじさや貧しさ、不安や悲しみを分かち合い、助け合って日々を生き抜いた。総じて隣近所は友好的で余ったものは譲り合った。長田の町も熱っぽく生きる人たちが満ち溢れていた。9歳の私には、当然のことながら何もわからない。ただ親の言う通り家族の動く通りに後を追うしかなかった。今となっては当時のことは想像に過ぎないが、父母の苦勞が想像を絶するものであったことは想像に難くない。おそらく日々の生活は、薄氷を踏むような日の連続であったろうと思う。小さな店舗付き住宅に家族8人。優しい母と、何事にも立ち向かっていった、愉快的父。姉3人、兄と弟2人。大家族ではあったが、当時はまあ平均的な家族であった。国民の多くを失ったこの国では、「産めよ増やせ」の大本命のもと、出生率はうなぎのぼりだった。各家の物干しには布製（浴衣地）のおしめが、満艦飾のように翻っていた。私は父が復員してから3年目に生まれた。上に一つ違いの姉がいた。生まれて3か月後に急逝した。福留家の墓にはその墓標に享年1歳と銘記されているが、実際は3か月の命だった。乳幼児の死亡率が今と比べたら驚くほど高かった時代しかも戦後間もない物資不足の折、おそらくその死因は栄養失調ではなかったかと思われる。母は多くを語ろうとせず、自分に責任があると涙ぐんでいた。次に生まれた私をきっと亡くなった子の生まれ変わりと信じて

いたようで、幼い私に「二人分生きるんやで」と繰り返し言っていたという。子だくさんは生活をより苦しいものにしたが、日本再生の思いがエネルギーとなって人口増加が続いた。いわゆる第一次ベビーブームである。そしてこの世代「団塊の世代」が戦後の経済復興の原動力になったことは歴史上の事実である。自画自賛だが兄弟姉妹から「章だけは特別扱い」とよく嫌味を言われたぐらい父母に可愛がられた。父親など平気で「親でも好き嫌いはある」と言っていた。

成長してからの知識だが、兵庫県でも神戸市の復興は目覚ましく元町や新開地を中心に全国でもいち早く復興を果たしたと思われる。経済の発展は敗戦国の国民の夢であり希望であった。元々勤勉な国民性の上に協調性も高く、民間からの上昇圧力は相当のものであったと思う。生まれ故郷である神戸との縁は、結局私の人生の中で、固いきずなとなって今に続いている。9歳、小学校3年生の夏に高知に移住して、高校3年生までを高知で過ごす。9年後には「南国土佐を後にして」東京の大学に進学。大学は1年間の予科を静岡県の三島市で、3年間を千葉県（津田沼）から東京（水道橋）に通学することになる。1年に2回ほど帰省していた。貧乏学生であった私はアルバイトをして旅費を稼いだ。当時もっとも安く帰省するには、夜行列車の自由席だった。寝台特急「瀬戸」。これに3車輛の自由席が連結されていた。東京発宇野（岡山）行。夜出発して翌日の昼頃到着する最も便利な列車だった。東海道本線、休み休み走るのでかなり時間はかかった。我慢強い人たちは、それでも文句言わず譲り合って乗車していた。それだけいつも混雑していて立錐の余地もないぐらい。信じられないことだが、網棚の上や4人掛けの座席の人の足と足のすきま、通路、デッキに新聞紙などを広げて寝るのである。まるで1升枡にコメを入れて、はじめは山盛りだったのが、枡を揺らしているうちにきっちり平均に収まるようなものだった。出発して数時間もたつと、それぞれ収まるところに収まってしまう。

考えてみればほとんどの人が終点まで行くので、トイレ以外動かなくてもすむのである。眠れぬ夜が明けて6時～7時頃ようやく神戸あたりに着く。15分ぐらいは停車するので、人によってはプラットホームの洗面所（当時は普通にあった）で歯を磨き、顔を洗った。私もそのうちの一人だったが、サッパリと気持ちのいいものだった。

東海道本線から山陽本線へ。列車はさらに西へ西へと進む。不思議なことに「1級河川 加古川」の看板を車窓に見て、妙に印象に残っていた。大きな立派な川だなという印象。その後まさか加古川市、稲美町、高砂市あたりが生活の拠点となり人生の大半を過ごす場所になるとは、全く思いもよらなかった。そういった自分の想像とは関係なく、運命の糸は、高知から東京、一度高知に戻ってから今度は岡山そして兵庫へと私を手繰り寄せる。現在は高砂市。運命のいたずら、皮肉のようなものを感じざるを得ない。神戸での9年間、私の人生の中で特別の意味を持つ。戦後の苦しい貧しい生活の中で、家族の愛に包まれ、丈夫に元気に育くれた両親に心からの感謝の言葉をささげたい。たくさんの思い出、喜び悲しみが詰まっている。今はセピア色に色あせているが、心の神戸は、明るく輝いている。人生の第一幕から第二幕へと舞台が変わる。

